

追手門学院大学
上方文化笑学センター年報
第4号



2023年度

追手門学院大学 上方文化笑学センター

目 次

活動報告

演劇落語×月亭遊方落語	横田 修	1
演劇落語×月亭遊方落語アフタートーク	月亭 遊方・坂口 修一・矢内 文章 広瀬 依子・横田 修 (進行)	5
上方演芸講演会「芸能を育んだまち・ミナミ」.....	広瀬 依子	11
2023 年度上方文化笑学センター活動記録		13
2023 年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧		14
追手門学院大学上方文化笑学センター規程		

演劇落語×月亭遊方落語

追手門学院大学上方文化笑学センター所員・社会学部 横田 修

2023年10月16日(月)、当センター主催にて古典落語を題材にした二人芝居と落語を聴く「演劇落語×月亭遊方落語」を開催した。会場は茨木市の男女共生センターローズ WAM (ワムホール) である。学外に開かれたイベントであるため、本学の学生や教職員に限らず多数の方にご参集頂いた。上方文化を代表する芸能「落語」と、落語にまつわる舞台作品を上演することで、学生や市民の皆様へ文化芸能に触れる機会を提供することが本イベントの目的である。この日、総じて百名を超える観客がその芸能に魅了された。

言うまでもなく落語は日本を代表する大衆芸能の一つである。演者が(通常は)一人で座布団に座り、身振りと話だけでいろいろな役柄を演じ分けるのだ。単なる滑稽話にとどまらず人情に訴える演目もあり、大変に間口の広い話芸である。対して演劇落語とは、古典落語の素材をリスペクトしながら二人芝居で魅せる現代演劇シリーズを指す。¹ 観客への語りや役柄同士の会話で構成される落語を立体化(二人の俳優が全身を使って表現)することで、観客の想像力をさらに掻き立てる表現である。

実演を披露したのは、落語家の月亭遊方(つきていゆうほう)氏、アトリエ・センターフォワード代表で演出家・劇作家・俳優の矢内文章氏、関西屈指の実力派俳優である坂口修一氏の三名である。上演後には元・雑誌「上方芸能」編集長であるセンター長の広瀬依子氏、筆者を交えてアフタートークを実施した(アフタートークについては別稿をご覧頂きたい)。

開演時間を迎えると、まずは月亭遊方氏の落語『寄合酒(よりあいざけ)』から始まった。町内の若い衆が金がないので肴をめいめい持ち寄り飲もうとするが、料理が不慣れな男ばかりが集まったため大混乱。がさつで喧しくて、とてもにぎやかなお喋りである。徐々に客席の笑い声のボルテージも上がり、サゲの後には客席から大きな拍手が上がった。

『寄合酒』は代々の桂春団治の十八番(オハコ)として知られた古典落語である。落語好きの方はよくご存じの演目かもしれないが、しかし客席の約半数を占める学生達の多くは生で落語を観るのが初めてであった。

そんな学生たちからの感想を下記に抜粋して紹介する。

◎落語を初めて生で観ました。話術や演技力がすごく、とても惹きつけられました。見る前は正直そんなに楽しみじゃなかったけれど、終わってみればすごく面白かったです。また機会があれば見てみたいなと思いました(社会学部一年生)

¹ “演劇落語×月亭遊方落語”. 表現者工房 HP (参照 2024-1-21). <https://iksalon-hyogensha.com/lp/engekirakugo20230527/>

◎言葉が昔のものもあって少し難しかったけど、現代の用語も混ぜられて面白かったです。イメージでは扇子をもっと使うと思っていました。一回も眠くなることなく話も分かりやすく、おもしろかったのでまた見てみたいです。ありがとうございました。(社会学部一年生)

◎場面の切り替えや、視線の動きで状況が分かって面白かったです。(経営学部経営学科一年生)

◎初めて落語を見たのですがとても面白かったです。古典的な芸能というイメージで難しそうだったり、とっつきにくいという勝手な印象を抱いていたのですが、全くそんなことなくすごく楽しめました。同じ言葉や動きを繰り返すというのが(落語にも演劇落語にも)どちらの演目でもあって、現代のお笑いしか知らない私でも、どこか知っているような気分になって客として空間に馴染むことができました。(心理学部三年生)

◎月亭遊方さんの落語は、私が未成年ということもあり共感はできませんでしたが、大人になったらこんな感じかもなあと思像はできました。面白かったです。(社会学部一年生)

◎一人で何役も演じられているのに、違う役にしか見えないのが不思議でした。演じ分けに本当に感心しました。テンポ感がよく、大変おもしろかったです。(社会学部二年生)

◎落語をする方は表情や仕草があんなにも変わるのかと驚きました。(社会学部三年生)

◎月亭遊方さんの演目では、連続で違う話をやられていて、あきないし、一つ一つオチ以外でもおもしろかったです。(社会学部一年生)

◎お客さんに向かって話しかけるのが印象的でした。話の切り替え時に、机を「バン！」と叩くので、聞きやすいです。また落語を見たいと思いました。(社会学部一年生)

◎初めは落語特有のリズムがわからず、とまどっていましたが、途中からは慣れてきて、気付いた時には話の中に引き込まれていました。(社会学部三年生)

◎落語は演劇落語と違って、一人でお話をすすめる形でしたが、まるで自分がその場にいるような世界観に入ることができて楽しかったです。そこにいない人物のわさびおろしを手にとる姿が見えました。(社会学部一年生)

◎落語で、複数人が喋っているのに簡単に情景が想像できて面白かったです。(社会学部一年生)

◎「落語」は中学生の時に、一度学校の方で見させて頂いて(その時は「時そば」を観ました)、いわゆる、現代のお笑いとはまた違った笑いがあると気付きました。そして、時を経てもう一度見た今回は、その時とはまた違った笑いのポイントがあったなと感じました。(社会学部二年生)

◎落語を久しぶりにみることで、やはり日本の芸能は面白いし、未来に残すべき文化であると感じた。(心理学部三年生)

◎落語の技、上手下手の話し方に感動した。(社会学部三年生)

◎イメージしていたものよりも、落語は迫力のあるものだと思います。落語はその日に何を話すかということを決めるという話を聞いて、驚きました。その日に決めた話であるのに、見ている人の興味を惹きつけたり、笑わせていたりすごいなと思いました。(社会学部一年生)

続いて、二人の俳優による演劇落語『抜け雀(ぬけすずめ)』が始まった。あらすじを、最初に演劇落語をプロデュースした表現者工房のHPより引用する。

〈演劇落語『抜け雀(ぬけすずめ)』あらすじ〉

小田原の宿屋「相模屋」は気のいい夫婦が営む小さな宿だが、大きな宿に客を取られて人気がない。焦るほど妙な客を泊めてしまい、主(あるじ)は妻に怒られっぱなし。今夜も粗末な身なりの男を泊めてしまい…。金は

無くても約束は守るのだ！誠実さが結実する奇跡の物語。²

サゲが異なるが、基本的には落語の演目と同様のストーリーである（サゲが気になる方は落語と演劇落語の『抜け雀』を見比べて頂きたい）。

落語で温められた舞台に俳優たちが颯爽と登場する。落語の枕のような世間話を交わしていると不意に物語へと突入するのである。人気がない宿屋の主人を演じる坂口氏に対して、絵描きや女房や雀など沢山の登場人物（や動物たち）を矢内氏が次々に演じていく。二人の熱演に客席はいつしか巻き込まれ、大笑いし、親子の情愛が垣間見える感動のラストへと導かれる。客席は大きな拍手に包まれた。

演劇落語について、次のような感想が学生から寄せられた。

◎とても新鮮で面白かったです。二人しかいないし、舞台セットも衣裳も無いのに世界観、人物像が伝わってきて表現がすごいと思いました。また観たいです。二人でどうやって演じるんだろうと思っていたけど、二人だからこその面白さもあるなと思いました。（文学部人文学科一年生）

◎本当に二人しかいないのかというほどの重厚な設定で、見ていて飽きなかったです。（社会学部二年生）

◎落語と演劇の組み合わせは考えたこともなかったが、落語の良さと演劇の良さが伝わってとても面白く感じた。落語と演劇は異なる点もあるけれど、互いの良さが組み合わさった時、“笑い”になるのだと感じた。（社会学部二年生）

◎観客を巻き込んだ空間でとてもおもしろかった。³三人とも取り憑かれたようでひきこまれました。⁴（経済学部三年生）

◎言葉遊びがすごく多くて、びっくりしました。「止まり木」に二つの意味があり感動しました。日にちの転換の時に回るのが印象的。屏風の後ろまで使うのがすごいと思いました。一人が動きまくり、一人が解説する体制も印象的でした。（社会学部一年生）

◎演劇落語を見て、落語は親しみやすいものだと思います。小道具も使わずに、二人の役者さんの演劇だけで物語を理解することができました。（社会学部一年生）

◎セットがシンプルで、二人の役者のみなのにコロコロ変化があり、楽しめた。演劇落語という新鮮なジャンルで、勉強になった。（心理学部三年生）

◎高い頻度で笑わせてくれるシーンがあり、全く飽きずに見つづけることができた。（心理学部三年生）

◎シンプルな舞台装置でも場所と人が分かる。演技と演出がすごい。（社会学部四年生）

◎矢内さんがいろいろな役に回っていましたが、奥さんを演じている時は奥さんにしか見えず、一文無しを演じている時は一文無しにしか見えず、二人しか舞台にいないのに何人もいるように見えました。すずめがお客さんの所まで飛んでいくシーンが面白かったです。お話と場面がどんどん進んでいって、注目すべき所がとても分かりやすく、小さい子でも大人でも世界観を楽しめる場だなと感じました。（社会学部一年生）

◎演劇落語は今回初めて知ったが、照明も途中で変わって思ったより演劇でびっくりした。（社会学部一年生）

◎勢いがすごかったです、、落語と演劇、違うようで似ていて、似ているようで違うけど、何が違うのかがはっきり

2 前掲“演劇落語×月亭遊方落語”

3 上演中に俳優が客席に降りて観客とやり取りをする演出があった。

4 『寄合酒』を披露した月亭遊方氏も城主役として『抜け雀』にゲスト出演しており、このような仕掛けもイベント的に客席が盛り上がる一要素であった。

しない感じです。落語も演劇落語も、その世界の情景がはっきりと想像できました。(社会学部二年生)

◎落語だと想像するのが難しい昔の様子分かりやすく、楽しかった。(文学部人文学科一年生)

◎初めて落語を見て、想像していたよりもフランクで面白かった。演劇だと、初心者の方は理解しやすかった。(社会学部二年生)

◎座っての落語とは違った大きな動きの演劇落語は休み所がなく、演者さんは大変そうだなと思いました。(笑) その大変さも楽しそうにみえたのでおもしろかったです。お客さんの笑い声や雰囲気込みの舞台だったなと感じました。客席も一緒に世界に入り込めてとてもよい時間を過ごせました。ありがとうございました!! (心理学部二年生)

終演後のアフタートークでは、作品に関する感想をシェアした後、落語家が映像作品(映画/テレビ等)に出演する際には演技に困る人が多いといったエピソードから、「落語」と演劇における演じ方の違いなど実演家だからこそ話せる興味深い話を伺うことができた。冒頭にも記したが、アフタートークの内容については別稿をご覧頂きたい。

落語に限らず演劇も「生」で鑑賞したことのない学生は多い。本来、成り立ちの全く異なる二つの文化芸能を同時に鑑賞することのできた本企画は、学生たちにとって得難い学びの機会になったのではないだろうか。

上方文化笑学センターでは、今後もこのような機会を作るべく、来年度も企画を考えているところである。

〈参考文献〉

『上方落語家名鑑ぶらす上方噺』(著・やまだりよこ、出版文化社、2006)

“演劇落語×月亭遊方落語”. 表現者工房 HP (参照 2024-1-21). <https://iksalon-hyogensha.com/lp/engekirakugo20230527/>

演劇落語×月亭遊方落語アフタートーク

月亭 遊方
坂口 修一
矢内 文章
広瀬 依子
横田 修（進行）
※文中敬称略

横田 これより、ご出演者の月亭遊方さん、坂口修一さん、矢内文章さんと、上方文化笑学センターの広瀬依子センター長によるアフタートークを行います。

広瀬 お三方には、こちらも汗をかきそうなほど熱演していただき、ありがとうございました。落語を初めて聞く方も多かったようですが、落語がどのようなものなのか、またお芝居になるとこのようになるのだということがよく分かり、大変興味深く拝見しました。

横田 演劇にすることで、元来の落語に登場する人々がどのようなやり取りをしているのか、非常に分かりやすく観ることができたと思います。演劇落語はお二人でされていますが、通常の落語は、どなたも、お1人でされているのですよね。

遊方 はい。1人でやるほうが、2人でやるよりも、楽にできると思います。

横田 そういものでしょうか？

遊方 はい。

坂口 いいえ、そんなことはないと思いますよ。

遊方 そうでしょうか。2人のときは役割分担もありますし、お芝居を立ったままするのも落語のセオリーと異なるので大変です。

横田 セオリー（決まりごと）がある分、楽なのかもしれませんね。

遊方 また、今日は初めて落語を見に来てくださった方が半分ほどいらっしゃったので、演目も非常に迷いました。ここに来たときは、演劇落語の前に、とにかくお客様に笑っていただこうと思っていたので、新作落語をやるつもりでした。新作落語のなかから、いくつか用意して、できるだけ笑いが多く起こるように、そして拍手をいただくという気持ちで来たのです。しかし実際には落語の基礎的な部分、本当の前座ではないのですが、前座話を少し長めにして、落ちを自分で付けたものを聞いていただきました。やはり、初めに基礎について分かっていたから、様々な落語を見ていただいたほうがいいのではないかと思ったからです。

横田 舞台上がられて、そこで演目を決められたのでしょうか。

遊方 はい。演目は2つ持って出ました。新作落語ではなく古典落語にしたのは、初めての方が多く、現代の話のあとに古典の『抜け雀』をすると、古典の芝居と分離してしまうのではないかと考えたからです。このイベントの世界観を壊さないように、早くから古典にしよう決めていました。また、登場人物が多い話を選びました。よく、落語家は複数の人物を演じ分けていると言われますが、落語家は演じ分けていません。声色も変えていません。お客様が頭の中で登場人物に分けて聞いているのです。俳優、役者とは異なる

- り、演じてはいけないというのが落語のセオリーで、お客様に演じさせるように持っていくようにしているのです。このような基礎の部分について、初めての方に聞いていただこうと思いました。
- 横田 受け取る側が自由に想像し、そのような人物をイメージしているということですね。
- 遊方 はい。酔っ払いをリアルに演じると、ろれつが回らず、何を話しているのか伝わりません。ですから、役者も最初に酔っ払いの真似をして、お客様がその人物を酔っ払いだと認識すると、そのあとも酔っ払いに変換されるのです。それは方言でも同じで、最初に土佐弁を話せば、そのあとは大阪弁を話しても、お客様は土佐弁だと認識するのです。このように、お客様にすべて委ねるのが落語の姿勢です。演劇は、見ていただいた通り、演じられるので、その違いも楽しんでいただければと思いました。
- 広瀬 役者は、相手の台詞を聞いて反応して演技をしますが、落語家がお芝居やドラマに出ると、その相手の台詞を待つのがつらいと聞いたことがあります。そのように感じるものなのでしょうか？
- 遊方 噺家が役者で出るときは、皆そう言います。自分が話していないときでも、役者は話さずに演技をしなくてはいけないので、それが苦手だという人は、噺家に多いようです。
- 坂口 そこは役者とは全く違うと思います。
- 遊方 はい、違いますね。
- 坂口 俳優は、むしろ聞いているときのほうがお芝居をしているというのでしょうか。自分の台詞を喋ってる時より、相手の台詞を聞いているときのほうが、しっかり芝居をしなくてはいけないように感じます。
- 横田 話は少々変わりますが、俳優にとって、舞台の仕事とテレビドラマの仕事は同じなのでしょうか。
- 矢内 違いはあまり感じません。
- 坂口 おそらく、演技としては同じだと思います。ただ、舞台では止められることがなく基本的に長回しです。ワンシーンを通しての集中力や、すべて通して演技をする必要があります。テレビドラマではカット割りが入りますし、同じ台詞をカメラの向きを変えて3回も4回も撮影することがあります。そのようなとき、聞いている側の人物は全く映らないこともあり、この時、俺良い演技してたのに！…映っていないという残念なこともあります。
- 広瀬 お芝居の台詞に反応して、いい演技をしていたのということでしょうか？
- 坂口 そうです。聞いている相手の反応で芝居が変わるので、カメラには映らなくても相手役は立っていることが多いですね。
- 横田 落語はどちらかというと、1人でドラマをやっているような感じでしょうか。話している場面の、見えている部分を、すべて1人でやるということですよ。
- 遊方 そうですね。ただし、5、6人の登場人物すべてを演技するのは、絶対にしてはいけません。まず1人、2人するといえますか、やはり演じないということです。自分という核がなく、すべて演技をしてしまうと、落語にならないですし、落語の間にならなくなります。
- 広瀬 文楽の太夫さんも、なりきる一歩手前で止めるのだとおっしゃっていました。
- 遊方 同じですね。
- 広瀬 文楽も1人で登場人物を語り分けていますし、1人で語る芸と、相手がいって演じるのは違うのだと、今、発見しました。
- 遊方 そうですね。演じず、お客様に渡して、お客様に想像させることが大切です。とにかく作品の描写をお客様に渡して、お客様の前でやり取りさせるように持っていく。そういう段取りをします。初めて見に来られた方は、どうしても観察モードになっているものです。芝居も音楽も、舞台に立つものは空間芸ですので、客席の空気が堅いと感じたとき、その空間を壊すために盛り上げようとやり過ぎると、反対につまらない空気につながってしまいます。従って、楽しい空気が混ざるように考えますし、今回も混ざってくれたときに演

劇落語に渡せたと思います。

横田 すりこぎが、よかったです。(注：登場人物がすりこぎの位置を仲間に教えるが、なかなか通じないという場面)

遊方 すりこぎは、もう少し引っ張ることもありますが、そこで話した下ネタは余計でした。寄席の空気でもやりましたが、要らないことを言ってしまったなと思いました。

横田 今回は、思っていた時間より長くなったのでしょうか？

遊方 本当にライブなので、空気によって、われわれも遊びながら進めることもあります。

横田 演劇落語のお二人に伺います。演劇におけるアドリブとはどのようなものなのでしょうか？

矢内 演劇には、アドリブというか、即興性がふんだんに入っています。俳優は台本通り演じているとはいえ、いわゆる離見の見について非常に努力をしていますので、相手の話すことを聞くことで、その状況のなかで生きていけると言えます。それに加えて、自分自身を客観的に見ること、感じられることが必要です。俳優はふざけているようで、意外と忙しく、考えながらやっているのだと思います。特に演劇落語を2人でやっていると、即興が一番面白く、大切なところだと感じるのと同時に、やはり助け合いが重要だと思います。

横田 そうですね。先ほど、相手のために台詞を言う、というお話もありましたが、言われた相手も、段取りなく言われると大変でしょうし、助け合いが重要ですね。

坂口 そうですね。今日、一番危なかったのは、矢内さんに突然“ちくわ”と“はんぺん”を言われたときです。正直、話しているときに余計なことを言わないでほしいと思ってしまいました。ちくわとはんぺんを受けて、咄嗟に「練り物」という言葉が出たので本当によかったです。出なかったら、しばらく地獄の時間がやってきてしまいます。

横田 それでは、お客さまから出演されたお三方への質問をいただきたいと思います。いかがでしょうか？

観客 A 私は漫才がとても好きです。M-1なども今大きな話題になっていますが、人を笑わせることは、とても難しいと思っています。落語の視点と演技の視点で、笑わせる工夫や努力の違いがあるのかについて興味があるため、人を笑わせるために意識していることがあれば教えてください。

坂口 1人で落語をするほうがやりやすいと遊方さんはおっしゃっていましたが、演劇の場合、どこで、誰のところでお客さんに笑ってもらうのかを考え、受け渡しをするものだと思います。台本に書かれている、笑ってほしいところで笑いが起こらず、1つ手前で笑いが起きると残念に感じることもあります。ですから事前に、この進め方では手前で笑いが起きてしまうかもしれないので、もう1つパスがあるといいのではないかなどと話して練習しています。演劇の場合は、パスをつないでいくことを意識しています。

矢内 遊方さんがおっしゃっていた、お客様の空気なり呼吸をできるだけ感じるように努力したいと思っています。無理に押していくと上滑りになるので、柔らかくいけるように意識しています。それでも、坂口さんを台から落とそうとした場面で、お客様が笑ってくださったので、そこは貪欲に2回目も行きました。

坂口 2回目は本当に危なかったです。矢内さんが僕を頭から落としかかってきたので、このまま落ちたら怪我をする！と踏ん張りました。

矢内 やはり、そういうように柔らかくいかないといけないと、心掛けています。

坂口 あ、ちなみに、この台から落ちそうになる場面はアドリブではなく、きちんと打ち合わせしています。この後も、二人でもめたりしませんので(笑)ご安心ください。

遊方 漫才の感覚は、新作落語だと思います。面白いことを串で刺すという感覚でしょうか。ですから、NGKなどに出演する文珍師匠やわれわれは、展開はなく、2人の人物が話しているように進めていきます。漫才の

ように2人の人間が立っているのではなく、1人で話しているのです、それ以上展開すると、お客様はついていけなくなります。私もお笑いは好きですし、M-1の、さらば青春の光やニューヨークのコントや、ほかに、今風の例え話などを新作落語に詰め込むこともあります。しかし、こちらは、あくまで古典落語です。寄席のなかに新作があると喜ばれますが、落語を好きになってくださる方、特に若い女性は、古典から好きになる方が多いです。ですが、古典落語の笑いは、テレビにない笑いです。そして、新作落語の笑いは、テレビでただで見られる漫才などの笑いの延長なので、どうしても1人でやると不利になります。漫才はインタレスティングですが、落語の笑いはファニーなのです。奥行きや深みが見えてくると、古典落語の笑いにはまっていくと思います。関西で面白いと言えば、ダウタウンさんや、テレビ番組『人志松本のすべらない話』など、様々浮かびます。古典落語はそれとは全く違いますが、話の幅が見えると、はまっていただける方が出てきます。そして今、小さな落語ブームといいますか、落語を聞く落女、落語女子が出てきました。私は漫才も好きですし、新作をやるときにはそれも詰め込みますし、漫才、コント、どちらも、古典も新作でやりますが、基本はそういうことを考えています。

観客 A ありがとうございます。

観客 B 私は、あまりお笑いが好きではありません。落語は、今日初めて生で拝見しました。落語について、ほとんど知らないのですが、1人で話されるのを聞いて本当に笑えるのかと思いながら見ましたが、大笑いさせていただきました。落語も面白いなと思いました。質問は、演劇落語についてです。落語を知らないのですが、あらすじだけを見て、最初はお二人の配役が反対の役だと想像していました。この配役にされたのは、どういった意図があったのか、教えていただきたいと思います。

坂口 まずは、反対だと想像していたのはなぜか、お聞きしたいです。最初に登場してきた人物の身なりがみずほらしい感じが、反対のほうがよかったですでしょうか。

矢内 確かに、そうかもしれせん。

遊方 無精ひげがありますからね。

矢内 それは一理あります。

遊方 本当に、そうかもしれせんね。

矢内 想像力に頼りきっている公演なので、やはり見た目は強いですね。

坂口 今回、台本と演出は矢内さんが担当してくれました。配役も矢内さんが決定したので、僕が異議申し立てをするわけにはいきませんでした（笑）。ただ今回は、1本で上演させてもらいましたが、通常の演劇落語を上演するときは、もう少し短い30分ほどの作品と、今回の少し長めの作品の2本立てで上演しています。ですから、1本目の配役とのバランスも考えられているのではないかと、勝手に思っていました。

矢内 そうですね。そういうことも考えますが、こちらの50分～60分かかる作品は、古典落語をそのまま書き下ろしたのではなく、私なりのアレンジを加えたものです。よくできている古典落語はすでに十分練られて素晴らしいのですが、それを2人の肉体でやるとなると、発話していない側がどうなっているのかなど、ストーリーを進めるためではなく、2人が生きている瞬間の積み重ねとしての台本が必要になります。そういう意味では「下げ」などは変わっていかねばいけない部分もあります。そうなったときに台本としては、1人の人物をしっかり主役にして芯を作ることが重要だと考えています。そこで、そういった役割をまず坂口さんに担当してもらおうと思いました。今回、私は演出も担当しました。稽古中も忙しく、そこまで頭が回らないこともあり、どちらかという、にぎやかしのほうでいったほうがいいかなと思い、この配役にしました。

遊方 反対だった場合、ヒゲだらけのスズメになりましたね。

坂口 それで全然いいですよ！かわいいと思いますよ。ヒゲだらけのスズメより、ヒゲだらけの女将のほうが問題

- だったでしょう。
- 横田 今回、坂口さんは一役ですね。
- 坂口 そうです。
- 横田 坂口さんは一役で、矢内さんがスズメから何から何役も演じられていました。もし、今回の演劇落語の演目を落語家がやるとすると、落語家が5匹のスズメもすべてされるのですよね？
- 遊方 そうですね。チューンまではこなせませんが、チュンチュンとは鳴きます。スズメの気持ちになってチュンと鳴きます。
- 矢内 落語の「下げ」では、父親をかごかきにってしまったというところで終わります。しかし今回の演劇落語では2人いますので、落語と同じ「下げ」で終わると2人の肉体が終われないように感じました。そこで今回は、主役が最後に何か言うように変えさせていただきました。そこで思い付いたのが、止まり木です。
- 遊方 演劇落語と落語の落ちに違いがあるのは、わざと変えているのではなく、芝居は芝居なりの落とし前の付け方があるということだと思います。
- 横田 この「下げ」に関しては、落語をよく見られている方がどのように思われるのか興味がありますね。
- 矢内 そうですね。
- 横田 それでは、最後の質問にさせていただきます。
- 観客 C 今日のリハーサルは、どのくらいの時間されたのでしょうか。そして、プロの方は、普段、落語、演劇落語ともに、どのように練習されているのでしょうか。
- 坂口 今朝こちらの会場に入り、設えを作っていたいて、そのあと少し音響や照明と合わせて、午後3時ごろから一度頭から通して公演に備えました。初めて演劇落語の作品を作るときは、約2週間かかります。
- 矢内 今回は2人だけなので、台本をお渡しして、その台詞自体は、ある程度まず自分で覚えます。そのあと、2人で合わせる時間を2週間ほど取ります。理想としては、1週間合わせて、間に何週間か置いて、もう1週間という熟成期間があると素敵ですね。そういうことを考えながら作っています。
- 横田 どちらにせよ、実際の稽古は2週間程度ということでしょうか？
- 矢内 そうですね。そういう意味では、台本をどのように覚えて、どのくらい即興的なものを混ぜていけるかになります。
- 坂口 今の説明は、最初の立ち上げのときの話です。今回の作品は初演を終えており、再演ですので、昨日東京から来て、合わせの稽古をして、本日本番という流れでした。
- 矢内 費用対効果を上げていかなくてはいけないですからね。
- 坂口 やらしい、やらしい（笑）。
- 横田 落語家さんのレパトリーのようなものでしょうか。
- 矢内 そうですね。そうしていかないといけないと思います。
- 坂口 僕らは普段の舞台だと、1カ月から1カ月半ほど、みっちり稽古しますが、落語家さんはどのくらい稽古されるのでしょうか？
- 横田 私も気になります。
- 遊方 人によると思います。稽古の仕方も、歩きながらの人もいますし、私はお風呂に入りながら稽古します。やはり先輩や師匠に稽古を付けてもらうほうがお腹に入りますし、バックボーンや知識も教えてもらえるので、誰かに稽古を付けてもらう人もいますし、練習の仕方はそれぞれ違うと思います。本当に稽古嫌いな人もいますし、稽古の好きな人もいます。そして、そのことと面白さは重複しないものです。
- 横田 遊方師匠はどちらですか？
- 遊方 私は直前のタイプです。当初は5つほどの新作を考えていましたが、今日の『寄合酒』という話は想定外で

したので、お弁当を食べるときにイヤホンで聞いて、あわてて仕上げました。『寄合酒』と、もう1つ候補があったのですが、それをここで決めようと思っていました。

横田 受付準備の際、イヤホンで聞きながらお弁当を食べられていましたね。

遊方 そうです。『寄合酒』は練習してこなかったのが、イヤホンで聞いていました。もう1つの作品は何とか入っていたのですが、どちらをやるかは、ここでアンケートを採って決めようと思っていました。

観客 C ありがとうございます。

横田 本日は貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。ご質問は尽きませんが、残念ながら時間いっぱいでございます。当センターでは今後もこのような催しを企画しておりますので、またご来場いただけますと嬉しい限りです。皆さま、本日はありがとうございました。

上方演芸講演会「芸能を育んだまち・ミナミ」

上方文化笑学センター所長・文学部 広瀬 依子

2023年12月2日、大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）で「上方演芸講演会」という単発の講座を担当させていただいた。同館は1996年にオープン。演芸・笑いに焦点をあてた施設、しかも公立は他に例がない。何度かのリニューアルを経ながら、現在も演芸・笑いについての資料収集・保存・展示や発信などの役割を担っている。

今回の講座のテーマは「芸能を育んだまち・ミナミ」とした。そこで、今回の講演要旨を以下に記録しておきたい。

同館は大阪市内の難波千日前、向かいには寄席・なんばグランド花月があるという立地。これだけで、演芸と深い関連がある場所ということがわかる。難波、千日前、心齋橋などミナミと呼ばれる地域は、実は芸能の集積地であった。歌舞伎、人形浄瑠璃文楽、新派、喜劇、歌劇（レビュー）、落語、漫才など、江戸時代以降、多くの舞台芸能が花を咲かせた。また、ダンスホールやカフェー、ジャズスポット等、海外の文化もミナミを中心に育っていった。

中でも道頓堀は芸のまちとして発展してきた。現在、大劇場としては大阪松竹座が孤塁を守る状態だが、かつてはさまざまな劇場が軒を並べていたのである。往年の名女優・浪花千栄子は、子ども時分に道頓堀の仕出し弁当店に奉公していた。劇場への配達の間、それらの芸に触れたことが、芝居の道へつながったのであろう。

この道頓堀から発展していったのがOSK日本歌劇団である。NHK連続テレビ小説（朝ドラ）の『ブギウギ』（2023年10月～2024年3月）の主人公のモデルになった笠置シズ子（シズ子）が、芸能生活をスタートさせたのが、当時（1927年）の松竹楽劇部。現在のOSKである。宝塚歌劇団を受験するものの不合格だった笠置は、意地でも道頓堀で一人前になりたかった、という趣旨を自伝『歌う自画像』（宝島社）の中で述べている。道頓堀は芸どころだったという認識がよくわかる。

先に述べたように多くの劇場や寄席が集まるということは、芸能どうしの交流も生まれる。歌舞伎は多くの文楽作品を移入しており、上方喜劇は歌舞伎や落語の作品を喜劇化している。落語には芝居噺という作品群がある。歌舞伎作品を取り入れたり、浄瑠璃を稽古する庶民が登場する演目である。戦時中のOSKは文楽との共演を行った。また、退団後に松竹新喜劇へ入団したレビュースターもいる。分野は違っても相互に影響しあいながら芸を磨き、発展していったのである。

私は劇場に通うことが生活の一部になっているが、歌舞伎、文楽、寄席、日本舞踊、喜劇、OSKを見るのはほとんどミナミ（近隣地域を含む）である。そして、キタの劇場では現代演劇、人形劇、ミュージカルを見ることが多い。ミナミは江戸時代から栄えてきたまちだが、キタは明治以降の繁華街である。古くからある舞台表現はミナミ、新しい風を運ぶ舞台表現はキタ。さまざまな表現方法があるからこそ、芸は広がるのだ。

2023 年度上方文化笑学センター活動記録

2023 年

- 4 月 27 日 第 1 回所員会議 於：Zoom ミーティング（オンライン）
- 6 月 1 日 第 2 回所員会議 於：Zoom ミーティング（オンライン）
- 6 月 13 日 縁側カフェ① 於：総持寺キャンパス WIL ホール
- 6 月 20 日 縁側カフェ② 於：総持寺キャンパス 5 階テラス
- 6 月 23 日 縁側カフェ③ 於：総持寺キャンパス WIL ホール（学生参加無し）
- 7 月 4 日 縁側カフェ④ 於：総持寺キャンパス WIL ホール（教員参加のみ）
- 7 月 11 日 縁側カフェ⑤ 於：総持寺キャンパス WIL ホール
- 7 月 14 日 縁側カフェ⑥ 於：総持寺キャンパス WIL ホール（学生参加無し）
- 8 月 2 日 第 3 回所員会議 於：Zoom ミーティング（オンライン）
- 9 月 13 日 第 4 回所員会議 於：Zoom ミーティング（オンライン）
- 10 月 16 日 実演家講演会『演劇落語×月亭遊方落語』
(出演：坂口修一氏、矢内文章氏、月亭遊方氏) 於：ローズ WAM ワムホール
- 11 月 16 日 第 5 回所員会議 於：Zoom ミーティング（オンライン）
- 12 月 20 日 第 6 回所員会議 於：Zoom ミーティング（オンライン）

2024 年

- 2 月 29 日 第 7 回所員会議 於：Zoom ミーティング（オンライン）
- 2 月 29 日 研究会（「演藝画報」資料鑑賞） 於：Zoom ミーティング（オンライン）
- 3 月 30 日 「上方文化笑学センター年報 第 4 号」発行

メディア掲載

- ・横田 修 社会学部舞台表現プロジェクト（通称 STEP）が地域交流をテーマに行った講演の取り組みで、学生が脚本を手掛けたことに関する記事：「舞台で伝えたい『近所づきあい』学生に脚本を書かせた二度の後悔」朝日新聞 2023 年 11 月 26 日（木）掲載。
【Web 版記事 URL】<https://www.asahi.com/articles/ASRCS5J39RCNPTIL004.html>

テレビ・ラジオ出演

- ・広瀬依子 NHK ラジオ第 1 『関西発ラジオ深夜便』0：30～0：40 頃
かんさい玉手箱～古典芸能情報コーナーに、関西の舞台芸能に詳しい専門家として出演
放送日：4 月 15 日（土）「現代人形劇」
6 月 10 日（土）「古典芸能どうしのつながり」
8 月 12 日（土）「芸能と怪談」
10 月 14 日（土）「朝ドラ『ブギウギ』と OSK 日本歌劇団」
2 月 10 日（土）「文楽・十一代目豊竹若太夫襲名」

受賞

- ・横田 修 主宰劇団「タテヨコ企画」が「第1回 日本みどりのゆび舞台芸術賞（公益財団法人日本フィランソロピック財団設立）」の選考委員賞を受賞

<https://np-foundation.or.jp/information/000175.html>

2023年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧

センター長	広瀬 依子	文学部 講師（上方芸能、伝統芸能）
所 員	浦 光博	追手門学院大学 教授（社会心理学、行動科学）
所 員	佐藤 貴之	文学部 講師（日本近現代文学）
所 員	辰本 頼弘	社会学部 教授（スポーツ科学）
所 員	横田 修	社会学部 准教授（演技・演劇教育論）
客員研究員	大坂 幸司	追手門学院大学校友会 理事、元(株)日本旅行勤務
客員研究員	大谷 邦郎	グッドニュース情報発信塾 塾長、NPO 法人 DDAC（発達障害を持つ大人の会） 監事、 元・MBS ラジオ報道部長
客員研究員	木村 未来	文学部 非常勤講師、元・読売新聞文化芸術部記者
客員研究員	瀬沼 文彰	西武文理大学兼任講師、桜美林大学非常勤講師、日本笑い学会理事
客員研究員	高垣 伸博	文学部 非常勤講師、大阪府立上方演芸資料館・ワッハ上方「プロモーション委員会」事 務局（プロデューサー）
客員研究員	鳶野 克己	立命館大学 文学部 特任教授、日本笑い学会会長
客員研究員	福山 侑希	奈良市子どもセンター、臨床心理士／公認心理師
特別顧問	坂井東洋男	追手門学院大学 名誉教授、元学長
特別顧問	西上 雅章	通天閣観光（株） 代表取締役会長、追手門学院大学 客員教授

追手門学院大学上方文化笑学センター規程

令和2年2月17日

制定

(設置)

第1条 追手門学院大学学則第58条に基づき、追手門学院大学（以下「本学」という。）に、上方文化笑学センター（以下「センター」という。）を設置する。

(目的)

第2条 センターは、本学の総合大学としての学問的蓄積を生かし、人類の誇りうる能力であり文化である笑いを対象にした、学問・文化の集積拠点となり、教育・研究活動の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 笑いを中心とした上方文化に関する情報発信
- (2) 笑いとユーモアを活用した教育プログラムの開発
- (3) 上方芸能及び笑いの文化に関する図書及び資料等の情報収集並びに提供に関する事。
- (4) 講座、講演会、シンポジウム等の開催
- (5) その他センターの運営に関する事。

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、学長の推薦により常任理事会の議を経て学長が任命する。
- 3 センター長は、センターを代表し、センターの運営を統括する。
- 4 センター長の任期は、4月1日から2年間とし、年度の途中で任命された場合は、就任した年度の翌年度の4月1日から起算して2年を経過する日までを任期とする。ただし、再任を妨げない。

(所員)

第5条 センターに、所員を置くことができる。

- 2 所員は、大学の専任教職員の中から、第2条の目的を達成するために必要な専門性を有する者を所長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は2年とし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第6条 センターに、客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、学外の有識者の中から、第2条の目的を達成するために必要と判断される者をセンター長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は1年とし、再任を妨げない。

(特別顧問)

第7条 センターに、特別顧問を置くことができる。

- 2 特別顧問は、センター長の推薦により学長が任命する。
- 3 特別顧問は、センターの事業推進についてセンター長に助言等を与える。

(事務の所管)

第8条 この規程に関する事務は、研究企画課の所管とする。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て学長が決定する。

附 則

- 1 この規程は、2020年4月1日から施行する。
- 2 追手門学院大学笑学研究所規程（2015年9月4日制定）は、2020年3月31日をもって廃止する。

附 則

この規程は、2020年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2022年4月1日から施行する。

追手門学院大学上方文化笑学センター年報 第4号

2024年3月30日発行

発行者：追手門学院大学上方文化笑学センター
〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番地15号
TEL：072-665-5024

印刷所：協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL：075-312-4010
